

コメディ・フランセーズの沿革

進藤, 誠一

<https://doi.org/10.15017/2557058>

出版情報 : 文學研究. 14, pp.42-68, 1935-12-30. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :

コメディ・フランセーズの沿革

はしがき

進藤誠一

コメディ・フランセーズ (la Comédie-Française) 又はテアートル・フランセー (le Théâtre-Français) は、フランス國民が自國の數多くの文化施設の中で最も大きな誇りを感じてゐるものゝ一つである。彼等は往々この劇團又は劇場を指して、「世界第一の劇場」といふ誇稱を用ひるのである。その謂は何もこの劇場の規模が世界第一であるといふのではない。(フランス國內に於てさへ、この意味で同劇場を凌ぐものは幾つもある。) またこの劇場が世界に類例の無い半官劇場 (le théâtre subventionné) であるといふ爲でもない。フランス國民がこの劇場を國家的の誇りとしてゐるのは、全くこの劇場の持つ由緒の爲である。「モリエールの家」といふ懐かしい別名を持つこの劇場の歴史は世界の演劇史の上に輝かしい役割を演じたフランス演劇の誕生、成長の歴史と絶對に離すことのできないものなのである。同劇場が過去數世紀を通じて成就して來た業績を顧ると、フランス演劇史の主要なる部分を獨占してゐると云つても決して誇張ではない。かくの如き光榮ある由緒を持つ劇場は世界に比類が無いのであつて、フランス國民が同劇場に就て持つ關心と誇りとは誠に當然のことゝ云ふ可きであらう。

近時「テアートル・フランセーの滅亡近し」の聲が頻りにフランスの批評家、好劇家達によつて發せられてゐる。

然しこの種の警告は今日に始まつた事ではなく、遠く十八世紀以來批評家達によつて屢々發せられてゐるのであるがそれにも拘らず同劇場は幾多の危機に堪へ、度々の内憂外患を克服してよく今日までその光榮の傳統を護り續けて來た。してみれば前記の警告の如きはフランス國民が同劇場の存續、隆盛を希ふ心情から發せられた杞憂の聲であつて寧ろかくの如き聲が絶へざる限り、同劇場の運命は安泰であるとの樂觀論に我々は與せざるを得ないのである。

我々フランス文學の研究にたづさはる者にとつては、コメディ・フランセーズの沿革に關する参照を必要とする場合が頻々として生ずる。その都度種々の専門書を繙讀する煩を省く爲に、自身の備忘として、同劇場の沿革を年代表的に書き留めておくことにした。もとより乏しい文献に據るものであるから隔靴搔痒の憾が深いが、もしフランス文學乃至一般演劇の研究に従事せられる方々の、檢索の勞を少くすることができれば本懐である。

私が参考とした主要書目は次の通りである。

Arthur Pougin : Dictionnaire historique et pittoresque du Théâtre et des Arts qui s'y rattachent.

Eugène Lintilhac : Histoire générale du Théâtre en France. •

Eugène Despois : Le Théâtre français sous Louis XIV.

Francisque Sarcey : Quarante ans de Théâtre.

Max Aghion : Le Théâtre à Paris au XVIII^e siècle.

Hippolyte Lucas : Histoire philosophique et littéraire du Théâtre français.

Félix Gailfe : Le Rire et la Scène française.

Emile Dacier: Le Musée de la Comédie-Française.

P. Larousse: Grand Dictionnaire universel du XIXe siècle.

Paul Mesnard: Notice biographique sur Molière. (Les Grands Ecrivains de la France: Molière, tome X.)

G. Michaut: La Jeunesse de Molière.

〃 : Les Débuts de Molière.

〃 : Les Luttes de Molière.

Karl Mantzius: Molière, les Théâtres, le Public et les Comédiens de son Temps.

Marquis de Rochegeude et M. Dumolin: Guide pratique à travers le vieux Paris.

Petit de Julleville: Les Comédiens en France au Moyen Age.

Lucien Dubech: Histoire générale du théâtre.

—

コメディ・フランセーズが今日の如き形態をとつた正式の時期は、一六八〇年とせられてゐる。即ちブルゴーニュ劇場 (Le théâtre de l' Hôtel de Bourgogne) と、ダネユー劇場 (Le théâtre Guénégaud) との併合を以て、コメディ・フランセーズの正式の誕生とする。このダネユー劇場はこれより先一六七三年にマレー劇場 (Le théâtre du Marais) を併合して居り、更にこのダネユー劇場なるものゝ前身は、有名なバレー・ロワイヤル劇場 (Le théâtre du Palais-Royal) に據つてゐたモリエール (Molière) の率いた一座なのであつて、モリエールの歿後 (モリエールは一

六七三年二月十七日歿) 或る事情のため、パレー・ロワイヤル劇場を退去し、新たなる劇場に據つてこれをゲネゴー劇場と稱したのであつた。

従つてコメディ・フランセーズの誕生には、ブルゴーニュ宮劇場、マレー劇場、パレー・ロワイヤル劇場(モリエール一座)の三つの劇場——十七世紀に於けるフランス演劇を三分した三劇場——従つて未だ、フランス演劇の事實上の誕生の幼藍となつた三劇場——がその母體となり、これ等の三つの要素が悉くコメディ・フランセーズに流入したわけであつた。それ故に、この三つの劇場の沿革を知らずしては、到底コメディ・フランセーズの本質を知ることにはできないのである。次に先づ三劇場の沿革の概略をたどつてみよう。

二

ブルゴーニュ宮劇場

この劇場の名稱となつたブルゴーニュ宮といふのは、遠く十三世紀以來アルトワ伯 (Le comte d'Artois) 家の巴里に於ける館であつたのである。その位置は今日の巴里市の第一區で、中央市場に眞近く、rue Mauconseil と rue Montorgueil とに接し、rue Française を挟む一劃であつた。従つてフィリップ・オグュスト城壁 (カペー王朝の Philippe Auguste (1180-1223) 王によつて築造せられた、當時の巴里市の外廓を圍らぬ城壁) に隣接してゐた。その後アルトワ伯領はフランドル伯家に渡つたが、マルグリット・ド・フランドル女王 (Marguerite de Flandre, 1350-1405) がブルゴーニュ公、フィリップ・ル・ハードィ (Philippe le Hardi) と結婚した後、彼女の父フランドル伯、ル

ル・ド・マール (Louis de Male) の死によつて、アルトワ伯領は彼女に傳はり、従つてブルゴーニュ公家の所有するところとなつた。巴里に於けるアルトワ家の館も同時にブルゴーニュ家のものとなつた。ブルゴーニュ公の名はこの時以來この館に附けられることになつたのである。その後累代のブルゴーニュ公はこの館を巴里に於ける住居と定めたのであつた。今日も尙殘存するジャン・サン・ポール塔 (La Tour de Jean sans Peur) はジャン・サン・ポールがこの館に増築したものである。ブルゴーニュ公家は、シャルル・ル・テメレル (Charles le Téméraire, 1433-1477) の死によつて廢絶し、館はその後無住となり、荒廢してしまつたので、フランソワ一世 (François Ier) の一五四三年、勅令によつてその取壊ちが命ぜられた。かやうにブルゴーニュ宮そのものは姿を消してしまつたが、その廢趾に建てられた劇場が、この館の名を襲つてブルゴーニュ宮劇場と稱した爲に、この名稱は同劇場の隆盛とともに永く後世に傳はることになつたのである。

さてブルゴーニュ宮劇場を建造したのは基督受難劇組合 (La Confrérie de la Passion) であつた。その頭聖史劇 (Les mystères) や奇蹟劇 (Les miracles) を演ずるブルジョワや職人の組合は各地に存在してゐたと思はれるのであるが、巴里に於けるこの組合は、一四〇二年十二月四日附の、國王シャルル六世の詔書 (Les Lettres patentes) によつて、巴里裁判區内に於て、如何なる場所、如何なる時期たるかを問はず、如何なる受難劇を演ずるも差支へなしとの免許を受けてゐた。(L'intitulé: Théâtre en France, t. Ier, p. 68 et 69) この特許は、同時に他の如何なる劇團にも巴里に於て演劇を興行することを禁ずる意味を持つてゐたので、この組合は以後巴里に於ける唯一の劇團たる特權を享受したのであつた。これこそフランス演劇史に於て、我々が確め得る最初の、常設劇場を持つた劇團なのであつた。こ

の組合は最初トリニテ救護院 (l'hôpital de la Trinité) に劇場を持ち (一五三九年迄)、次でフランドル宮 (l'Hôtel de Flandre) に移り (一五四三年迄)、最後にブルゴーニュ宮の取壊された跡に劇場を新築してこゝに移り住んだ。それは一五四八年のことである。

然るにこの年の十一月十七日、高等法院 (le Parlement) は命令を發して、この組合に一切の「救世主の受難に關するミステール、その他聖史に關するミステール」を演ずることを禁じ「他の宗教に關係なきミステール」を演ずることのみを許した。但しこの組合が享有して來た巴里に於ける獨占權はこの時改めて確認せられたのであつた。この命令は從來聖史劇の演出を主要の仕事としてゐた組合にとつて非常な打撃であつた。彼等はその存在の本質を奪はれた形であつたブテ・ド・ジュルヴルはこの時を以て中世の宗教劇の滅亡の時としてゐる (Les Comédiens en France au Moyen Age, p. 73)

十六世紀の後半から十七世紀の初期にかけての、ブルゴーニュ宮劇場の歴史は頗る曖昧で、諸の相矛盾する記述はいづれも推定の域を出でぬものゝみである。然し我々は次の二つの事實だけは、正確なる時期の指摘を避けて、確言することが出来る。その一は、組合が一五四八年の命令以後、自ら聖史劇以外の演劇に出演することを好まず、少くとも出演の度數を漸減し、その代りに、他の劇團——地方巡業のフランス劇團、又はイタリヤ劇團、イスパニヤ劇團、イギリス劇團等の外國劇團——にブルゴーニュ宮劇場を賃貸することを始めてゐることである。その二は、組合がその獨占權を護ることに汲々として、巴里市の内外で興行する巡業劇團の一つ一つに抗議し、その禁止方を當局に訴へてゐることである。これは、俳優をやめて劇場主に轉身した組合が、自己の利益を擁護する爲の、必然的な措置であつたのであるが、この特權の爲に巴里に於ける劇場の發達が沮止せられたことは、否み難い事實であらう。

組合のこの独占權擁護の抗議は、然し必ずしも何時も成就したわけではなかつた。セン・ジェルメン市場 (la foire Saint-Germain) —— 毎年二月の始めから約二ヶ月開催せられる臨時市場でその創設は十二世紀に溯る——その他諸所に於て幾つかの地方劇團は、組合の壓迫にも拘らず、小屋掛けの興行を續けることを許されてゐる。但し興行中は組合へ高額の權利金を支拂ふことを命ぜられてゐるのである。

十七世紀に入つては、受難劇組合員の出演は全く無くなつたやうである。(P. de Julleville: *les Comédiens en France au Moyen Age*, p. 74) そして劇場はフランス人劇團や、イタリー人劇團に相當長期にわたつて賃貸せられ、これ等劇團の常設的劇場の觀を呈してゐた。この頃、よくブルゴーニュ宮劇場を使つた一座に「王室附俳優」(*les comédiens royaux*)といふ肩書を持つ一座があつた。ヴァルラン・ルコント (Valleran Lecomte) を座長とし、ブルゴーニュ宮劇場に據ることが最も多かつた。然し賃貸料の問題に關し、組合との間に紛争の絶えることがなかつた。一座は組合の亭有する独占權の不當を鳴らし、その解消を頻りに高等法院に訴へたが、効果が無かつたのである。この一座が國王室附俳優と名乗るに至つた時期は明瞭でないが、*Petit de Julleville* は一六一一年以來と斷定してゐる。

組合は賃貸料のほかに、劇場の舞臺に最も近い二つの棧敷を常に占有する特權をも保留してゐた。この棧敷は *les loges des maîtres* (組合の領袖達の棧敷の意であらう) と呼ばれてゐた。この親方連はその棧敷に陣取つて、冷笑と嫉妬を以て後進劇團の芝居を批評したのであつた。

王室附一座は一六二二年、組合と衝突してブルゴーニュ宮劇場を去り、旅興行に出たが、一六二八年九月三十日、再び同劇場に復歸し、長期の契約を組合と締結した。その翌一六二九年、十一月七日の勅令は、遂に劇場の所有權を

王室附劇團に與へ、組合は興行中、一日三リーヴル・ツルノワ (Hve tournois) を徴收する權利を保留するのみとなつた。爾來一座は一六八〇年のゲネゴー劇場との併合まで、決してブルゴーニュ宮劇場を離れることはなく、ブルゴーニュ宮劇場と云へば直ちにこの王室附劇團を指すことになつたのである。

受難劇組合と王室附劇團との紛争はその後も絶えることがなかつた。今や全く純然たる劇場所有者となり了つた組合に依然として獨占權を賦與しておくことは、事實合理的ではなかつた。組合は宛然株式會社の觀を呈し組合の領袖となることは、非常な利潤を與へる投資となつたので、この地位を得る爲の運動は多くの弊害を伴つたのであつた。然し世は封建の時代であつた。一四〇二年以來享受せられ、且つ屢次の勅書によつて確認せられて來たこの特權を廢することは國王にとつても容易なことではなかつた。兩者の間の訴訟は約半世紀の間續けられたが、遂に一六七七年ルキ十四世 (Louis XIV) の威望によつて漸く問題が解決せられた。受難劇組合は解散を命ぜられ、その財産は綜合救護院 (L'Hopital general) に與へられ、ブルゴーニュ宮劇團は從來組合に支拂つて來た權利金を、同救護院に支拂ふことを命ぜられた。これが所謂「救貧税」(Le droit des pauvres) の嚆矢であつて、その後この制度は他の劇場、興行物にも適用せらるゝに至つたのである。

ブルゴーニュ宮劇團は以後ルキ十三世、ルキ十四世の治世を通じ、一種の官設劇場とも謂ふ可き性質を持続した。一六三四年には、競争對手たるマレー劇場から六人の俳優が國王の命令によつてブルゴーニュ劇場に抜き取られてゐる。但し、ブルゴーニュ劇場に専屬することは、當時一般俳優にとつて大なる名譽であり、且つ利益でもあつたのである。一座の俳優達は多額の年金を國王から與へられて居り、名優 (Les Grands comediens) の尊稱を以て指され、

王室附劇團の肩書は、モリエール一座が國王附劇團 (la troupe du Roi) の肩書を用ふることを許された後も、一般社會に於ては専らブルゴーニュ宮の一座を指すものと考へられてゐた。一座は屢々國王及び廷臣の來臨を得た。名聲一世を風靡したコルネイユ (Pierre Corneille, 1606-1684) の主なる作品を初演したのはこの一座であつたし、當時コルネイユと對立してゐた人々の作品も同様であつた。後に至つてはラシーヌ (Jean Racine, 1639-1699) の作品も最初の二作を除いては悉く同劇場で初演せられてゐる。

ブルゴーニュ宮劇場はその初期に於ては、在來の道化芝居の上演を得意とし、グロ・ギヨーム (Gros-Guillaume)、ゴーチエ・ガルギーユ (Gauthier Garguille)、チュルルユペン (Turupin) の三道化役者の名トリオに依つて、巴里の民衆を喜ばせたのであつた。またアレクサンドル・ハルディー (Alexandre Hardy) の通俗劇も、この一座の重要なベルトワールであつた。然し從來民衆専門の娛樂機關であつた劇場が、王室並びに宮廷を觀客として持つやうになるに連れ、一般觀衆の嗜好も次第に洗練せられ、俳優の演技も次第に道化味を減じ、上演脚本も悲劇が重要部分を占めるやうになつた。

一六三〇年頃ベルローズ (Pierre Le Messier, dit Bellerose) といふ俳優が一座に加はつたが、その優雅な、稍氣取つた藝風が當時の觀客の嗜好に投じ、花形俳優として非常な人氣を得、遂に座長の地位につくに至つた。一座が悲劇を主要レベルトワールとするに連れ、俳優も亦悲劇を得意とする者が多く集められ、ベルローズ風の藝風が一座の基調となつて、ブルゴーニュ宮風とも謂ふべき、莊重な優雅な、誇大的な、自然味に乏しい藝風ができたのであつた。これが當時の觀客の嗜好に適してゐたことは、後にモリエールが巴里でコルネイユの悲劇「ニコメード」(Nicomède)

を頗る自然な、誇張の無い藝風で演じた時、甚だ不評であつたことを見ても推測することができるのである。十七世紀の観客の眼には、悲劇の演出に於てはブルゴーニュ宮の流儀が最上のものであり、モリエール一座は悲劇にかけては到底ブルゴーニュ宮の敵ではなかつたのである。ラシヌがその悲劇「アレクサンドル大王」(Alexandre le Grand)をモリエール一座に上演せしめた後、その演戯に不満を感じ、人の勧めにより更にこれをブルゴーニュ宮に上演せしめ、モリエールの不快を買つた話はあまりに有名である。モリエール一座が悲劇の演出に失敗したことが、寧ろモリエールを驅つて喜劇の創作に専念せしめた一つの動機と見ることもできるのである。

モンフルーリー(Montfleury)も亦ブルゴーニュ宮の特色をなした俳優の一人であつた。一六三七年頃、地方から見出されて一座に加はつたのであるが、肥大した體格を持ち、その誇大した藝風は一般観客の大喝采を博したものであつた。然し心有る人々の鑿鑿を買つたのも事實であつた。シラノ・ド・ベルジュラック(Cyrano de Bergerac)の如きは彼を憎悪した一人であつて、エドモン・ロスタン(Edmond Rostand)の戯曲「シラノ・ド・ベルジュラック」のブルゴーニュ劇場の場面の出來事は、ロスタンが實話として傳へられた話をその儘採用したものである。

ブルゴーニュ劇場の末期に於て燦然と輝いてゐるのは名女優シャンメーレ(Champfémle)である。彼女はもと地方巡業の女優であつたが、一六六九年、マレー劇場に聘せられ、翌年更にブルゴーニュ宮に招かれた。彼女の本名はマリー・デール(Marie Desmares)といひ、一座の俳優シャンメーレの妻であつた。彼女は決して美しくはなかつたが天成の悲劇的情熱に加ふるに、非常に美しく且つ豊かな聲を持つてゐた。彼女はこの聲を自由自在に驅使して、或は切々と胸に迫る哀音となし、或は凛々として満場を壓する叱咤の聲となし、或はまた耳を聳く裂帛の叫聲となし、觀

衆を魅了したのであつた。獨り一般觀衆に止まらず、彼女の崇拜者は作家達の中にも少くなかつた。就中ラシーヌは彼女をブルゴーニュ宮の舞臺で一と目見て以來、全く彼女に心酔し、やがては彼女との戀愛にまで進んでしまつた。以來ラシーヌの女主人公は悉くシャンメーレの演ずるところとなり、作者と女優とは協力してその演出法を研究したと云はれてゐる。

かやうに悲劇では全く獨占的の優位を占めたブルゴーニュ宮も、喜劇では初期の名トリオを名残りとして（彼等はいづれも一六三〇年代に殆んど相前後して死んだ。）その後、彼等の名聲を續け得る者は無かつた。殊にモリエール一座の出現以來、その成功を嫉視し、絶えず惡聲を放ち續けたものであつた。モリエールも亦ブルゴーニュ宮を競争の對象として、惡聲に對し惡聲を以て應酬した。この間の消息はモリエールの傳記に詳かであるからこゝには觸れないことにする。

モリエールの歿後（一六七三年）は、ブルゴーニュ宮もモリエールの傑作を續々上演した。また、モリエール的一座から優秀な俳優の引き抜きも行つた、ミシエル・バロン（Michel Baron）の如きはその一人であつた。座長を失つて途方にくれてゐるモリエール一座を尻眼にかけて、ブルゴーニュ宮はますます隆盛を續けた。然しコルネイユもラシーヌも既に作品を書かなくなつてゐた。彼等の作品を主要レペルトワールとしてゐた一座は、稍寂聊を感じてゐた。殊に一六七九年にはシャンメーレがブルゴーニュ宮を去つて、ゲネゴー劇場へ加入した。彼女の才能、名聲と共にコルネイユ、ラシーヌのレペルトワールもブルゴーニュ宮から持ち去られた譯であつた。従つて、一六八〇年に兩座の合流が行はれた時には、その必要を最も強く感じてゐたのは、寧ろブルゴーニュ宮の方であつたであらう。

マレー劇場

十七世紀の初期、ブルゴーニユ劇場が未だ王室附劇團の専用となるより以前、この劇場に一時立てこもつた劇團に「オランジュ公附劇團」(Les comédiens du prince d'Orange)と稱する一座があつた。ル・ノワール(Le Noir)を座長とし、モンドリー(Mondory)を花形役者を持つ一座であつた。この一座はモンドリーのほか、ジャドール(Jacquemin Jador)、ジエドレー(Jodelat)等の名喜劇俳優を持ち、王室附劇團の有力なる競争者であつた。一座は一六二八年、契約満了と同時にブルゴーニユ宮を去らねばならなかつたが、この時一座は既に巴里市民の間に抜く可からざる地盤を作つて居たので、旅の巡業に出ることをせず、受難劇組合の諒解の下に、ベルトール掌球場(Le jeu de paume Berthault)に據つて自前興行を企てたのであつた。掌球ゼユードボームといふ遊戯はその名の如く掌と球とを用ひる遊戯であるが、遠くギリシヤ、ローマに於ても存在したと云はれる。十四世紀頃から掌の代りにラケットを使ふことが始まり、且つ屋内遊戯となつた。フランスに於てはヴァロウ王朝の時代がその流行の絶頂であつたが、その後もアンリー四世、ルキ十三世等の諸王はこの遊戯を好んだので、當時の貴族、ブルジョワの間に盛んに行はれ、巴里市中には諸所に屋内掌球場が建てられてゐた。この遊戯は今日の庭球と排球とを混合したやうな遊び方をするもので、競技者間で直接球を投げ合はず、必ず一度壁に投げ、その反射を待つて應酬するのを特色とする。その競技場は必ず縦二八・五米、横九・五米の廣さを持ち、且つ相當の高さも持たなければならなかつた。然るにルキ十四世の世となり、撞球(Le billard)の遊戯が

發明せられ、王がこれを採用した爲、掌球は忽ち廢れてしまひ、その競技場は或は取壞たれ、或は劇場に改造せられたのであつた。十七世紀に於てこの種の掌球場が劇場に用ひられた例は頗る多いのであつて、或る意味に於て掌球の衰滅が十七世紀の巴里の演劇を隆盛ならしめたとも云へるのである。

さてベルトー掌球場はセン・マルテン門 (La porte Saint-Martin) から程遠からぬ今日のベルトー袋小路 (l'impasse Berthaud) に在つた。この一座は一六二九年、その獨立興行の初演の演物として、當時未だ全く無名であつたコルネイユの處女作、喜劇「メリート」(Métie) を上場したのであつたが、この嶄新な喜劇は忽ち巴里人の人氣を得て、コルネリュの名を一躍世人に知らしめると同時に、一座の地盤も全く確乎たるものとなつたのであつた。一座は一六三二年にミシエール・ル・コント街 (rue Michelle-Comte) のフアンテーヌ掌球場 (Le jeu de paume Fontaine) に移つた。然し界限の人々が劇場の爲の雜沓を厭つて抗議した爲、一座は再びそこを去つて、一六三五年ヴィエイユ・デュ・タンブル街 (rue Vieille-du-Temple) のマレー掌球場 (Le jeu de paume du Marais) に移り、掌球場の名をこの儘、マレー劇場 (Le théâtre du Marais) と稱した。爾來一座は一六七三年、ゲネゴー劇場と併合するまで、この位置に定住し、ブルゴニー宮劇場と對立したのであつた。

モンドリーは悲劇俳優として古今の名優であつたが、また劇場經營にかけても、卓越した手腕を有し、彼が健在であつた間は、マレー劇場はブルゴニー宮を厭する程の盛運を見たのであつた。彼はリシュリュー大僧正 (Le cardinal de Richelieu) の眷顧と尊敬を受けてゐたので、従つてマレー劇場は宰相の庇護の下にあつた。それにも拘らず一六三四年に、ルキ十三世の勅令により、一座の最も重要な俳優六人、ルノワール (Le Noir) とその妻、ジエドレー

(Jodelot) とその弟レーゴウ (L' Espy)、ジャドール (Jadot) 及びアリソン (Alison) をブルゴーニュ宮へ抜き去られてしまった。これはマレー劇場がリシュリューの保護を受けてゐることを熟知して、國王がわざと、自分の保護するブルゴーニュ宮の爲に引き抜きを行ったのであつて、ルキ十三世が國家の重大問題に關して、事ごとに大宰相に屈伏を餘儀なくせしめられる腹癒せの一つであつたのである。

然しモンドリーはこの大打撃に落膽せず、直ちに新座員を物色し、バロン (Baron) 夫婦——後にモリエールに愛せられたミシエール・バロン (Michel Baron) の兩親——その他を得て、見事に難關を切り抜けたのであつた。然しマレー劇場の名聲の大半はモンドリーによつて支へられたと云ふ可きであらう。

先にコルネイユの「メリート」を見出して上場したのもモンドリーであつた。コルネイユはこの恩誼を感謝しその後の作品もモンドリーに與へてゐた。モンドリーの雄頸な、熱狂的な、稍誇張的な演技は、初期のコルネイユの作品に最も適したものであつた。就中一六三六年の悲劇ル・シッド (Le Cid) の上演は、フランス演劇史上の劃期的の大事件であり、コルネイユの名聲がこれによつて一舉に定まつたことは、あまりにも有名な事實である。

同じ年、モンドリーはまたトリスタン (Tristan l' Hermie) のマリアヌ (Marianne) を上演して、これも亦大成功を収めたのであつた。

若しモンドリーをして活躍を続けしめたならば、リシュリュー大宰相の庇護と、大コルネイユの後援とを以てすればマレー劇場は十七世紀のフランス演劇史上に、更に更に大なる業績を残したことであらう。然し不幸にしてモンドリーは一六三七年二月二十二日新築のリシュリュー宮に於て大宰相の催しにかゝる大演劇會に於て、「スミルヌの盲人」

(l'Avoué de Sainne)——リシュリューの原案を、彼に屬してゐた五人の詩人が悲劇に書きおろしたものに病を押して出演中遂に倒れ、再び舞臺に立つことができなかつた。(彼は一六五一年まで生きてゐた。)

モンドリーを失つたマレー劇場は忽ちにして、活動力を失ひ、人氣も下り坂に向つてしまつた。その上モンドリー無きマレー劇場はリシュリューの保護を失つたし、コルネイユも以後はその作品をブルゴーニュ宮へ與へるやうになつた。一座は已むなく古い笑劇を演じて、お茶を濁すほかはなかつた。かやうに不振に陥つた一座から、有能な俳優は續々とブルゴーニュ宮へ抜かれていつた。悲劇に巧みで、且つ喜劇では百姓の役を專賣としてゐたバロン、フィレン(Philippin)の役名で笑劇を得意とし、且つ作者でもあつたド・ヴィリエ(De Villiers)及びその妻でモンドリーの相手を勤めてゐた女優等がそれであつた。かくしてマレー劇場の末期は不振の極に達し、ブルゴーニュ宮や、パレー、ロワイヤル劇場と對抗する力は到底無かつたのであつた。

四

モリエール一座

モリエール一座の歴史はとりもなほさずモリエールの半生の歴史である。そしてこれはあらゆるモリエールの評傳に詳述せられてゐる。よつて我々はこの部分の記述をできる限り簡略にし、モリエールの歿後の一座の成行をより詳しく記すことにするつもりである。

第一、貴顯劇場時代

モリエール (Jean-Baptiste Poquelin dit Molière, 1622-1673) の最初の芝居道への踏み出しは貴顯劇場 (l'Illustre Théâtre) の旗上げであつた。それは一六四三年、モリエールが二十一歳の時であつた。累代巴里で室内裝飾商を營む眞面目なブルジョワの家に生れ、じつとして居れば父の後を繼いで王室附室内裝飾師 (Le tapisier ordinaire de la maison du roi) の官職にも就くことのできる身分であり、而も父の配慮でクレルモン校 (le collège Clermont) に入學して當時としては先づ最高の教育を受けた身であり乍ら、家名を汚し、財産を棄て、家族を泣かせてまでも、まづしづらに芝居道といふ荊蕀の道に身を投じた青年ボクレンのこの熱狂振りには、色々の動機が考へられるであらうが所詮これも一つの宿命であつたのだと我々は考へ勝ちである。

マドレーヌ・ベジャール (Madeleine Béjart) と呼ばれ、モリエールより四歳程年長の女性が一座の中心人物であつた。彼女は實に數奇な運命をたどつた女であつた。父は下級の官吏 (huissier audiencier à la Grande Maîtrise des eaux et forêts) であつたが、この頃既に故人であつた。母は嘗て旅芝居の女優をしたことがあると推定せられるやうな女で、その子供達の品行に關し極端に寛大であつたことから推しても、可なり自墮落な過去を持つてゐた如く思はれる。要するにマドレーヌの家庭は決して所謂堅氣かたきの家ではなかつたのであつた。彼女は長身で、金髪で、相當の美人であつたらしい。早くから父母の家を飛び出して、旅役者の群に入つたり、貴族の妾になつて私生子を生んだりしたくらゐで、勝氣な白無垢鐵火の女であつた。モリエールが何時頃から彼女と知り合ひになつたかの點に就ては、諸説紛々としてゐるが、兎に角貴顯劇場にモリエールが馳せ參するに至つた動機には、彼女に對する尊敬乃至愛慕が大

きな部分を占めてゐたと信ぜられてゐる。或時期に於ては彼女がモリエールの情人であつたことも事實と思つて可いであらう。とに角彼女は貴顯劇場の旗上げ以後、終始モリエールの好伴侶として浮沈を共にしたのであつて、モリエールの生涯乃至事業に最も深い關係を持つた女性といへば彼女であらう。

さて貴顯劇場の座員はモリエール、マドレーヌを中心として、ほかに女三人、男五人。その内にはマドレーヌの同胞ジュヌヴィエヴ (Geneviève) とジョゼフ (Joseph) が加はつてゐた。この十人の自稱俳優の中で、舞臺經驗のあるのはマドレーヌ一人であつたのであるから、貴顯劇場なるものはその尊大な名稱に似てもつかぬ、半素人劇團に過ぎなかつたのであつた。従つて一座に於けるマドレーヌの権力は絶對的であつた。一六四三年六月三十日に作成せられた公正證書の中には、配役の方法を規定してあるが、その中に「マドレーヌ・ベジャールは思ひの儘に役を選びとることを得」との條款が見出される。これに反し主人公の役は「クレレン (Cléin)、ポクレン (Poquein) 及びジョゼーフ・ベジャールの三人の間にて公平に順番に與へらる可し」との規定になつてゐる。これによつてみれば、旗上げ當時に於てはモリエールは一座の中で特に有力な地位を占めてゐた譯ではなかつたのであつた。

さて旗上興行の場所として選定せられたのはメティエ掌球場 (Le jeu de paume des Métyers) であつた。これは現今の巴里左岸、マザリーヌ街 (rue Mazarine) の第十二、第十四番地に當る場所で、マラケー河岸 (Le quais Malaquais) に眞近く、綜合學士院 (l'Institut) の圓屋根に見おろされる地點である。一座は劇場の修繕を待つ間その年の十月と十一月とにルーアン (Rouen) で腕慣らしの興行を行ひ、翌年一月愈々巴里で初興行を行つた。一座の上演脚本に就ては正確なことを知ることを得ないが、悲劇ばかりを上演したやうであつた。マドレーヌは悲劇が得

意であつたし、モリエールも悲劇俳優たることが念願であつたのである。

トリスタン・レルミート (Tristan l'Hermite)、ニコラ・デ・ファンテーヌ (Nicolas Desfontaines)、デュ・リエール (Du Ryer) 等、二流三流作家の悲劇が主として上演せられたものと想定せられる。

最初の成績は、先づ成功といふ程度であつたらしい。然し、ブルゴーニュ宮、マレーの二大劇場と鼎立して競争を続けることはこの小劇團には無理なことであつた。間もなく失敗の兆候が明かになつた。資金の乏しかつたことも、高利の金を借りる必要を招くことによつて、一座の財政状態を一段と悪化したのであつた。場所が悪いと思つたものか、それとも他の理由によるのか、一六四五年の初めに、ラ・クロワ・ノワール掌球場 (Le jeu de paume de la Croix-Noire) に移つてゐる。これは現今のセレステン河岸 (Le quais des Celestins) の第三十二番地に當る場所である。然し乍ら事態は毫も改善せられなかつた。この年八月二日、モリエールは一座の負債の爲シャトレ (Chatelet) に拘禁せられてゐる。勿論モリエールは盟友達の奔走によつて間もなく出獄したのであらう。然しこの不況の中で座員の一部は脱退してしまひ、残るはベジャール三兄弟と、モリエールとクレレンの五人になつた。これに新たに二人の女優を加へ、八月十三日に第二回の契約書が作成せられてゐる。

巴里に於ける貴顯劇場のその後の行動は我々には不明である。彼等はその後間もなく巴里を去つて地方巡業の旅に出たものと思はれる。爾後約十五年間、一座の漂泊の生活が続くのである。さて貴顯劇場の略史を終るに當つて記すべき二つの事がある。一つはジャン・ボクレンが本名を棄て、モリエールといふ雅號を名乗り始めたのは、この貴顯劇場時代のことであつたといふ事實、今一つは同じくこの時代の中にモリエールは一座の座長の位置に推され、劇場

經營の仕事までやるやうになつてゐたといふ事實である。

五

第二、漂泊時代

一六四五年の八月以來貴顯劇場 (*L'Illustre Théâtre*) の消息が全く不明になつてゐる。然し信ず可き文献によつてこの年の暮にモリエールとベジャール兄妹とが、ラ・グイエヌ (*La Guyenne*) に於て、太守 (*le gouverneur*) エペルノン公 (*Le duc d'Epemnon*) の専屬劇團に加入してゐたことが知られる。この一座ではモリエールは座長ではなくて、デュフレレーヌ (*Dufresne*) といふ俳優が座長であつた。

その後約十五ヶ年間のモリエール一座の足跡は到底明白にすることはできない。モリエールの生涯のうちで最も曖昧なのはこの時代に於ける彼の行動である。各地に残つてゐる公正證書、洗禮臺帳、或は個人の備忘録等によつて、僅かにその足跡をたどる許りである。

彼の一座が興行を行つたと信ぜられる主なる土地は次のやうなものである。(Michaut: *la Jeunesse de Molière* による)

トゥールーズ (*Toulouse*)

アルビ (*Albi*)

カルカッソーヌ (*Carcassonne*)

ナント (Nantes)

ナルボーン (Narbonne)

アジャン (Agen)

グルノーブル (Grenoble)

リヨン (Lyon)

モンペリエ (Montpellier)

アヴィニオン (Avignon)

ペズナ (Perzas)

ボルドー (Bordeaux)

ベジエ (Bejiers)

ディジョン (Dijon)

右の地名を見るにその大部分はグイエヌ (Guienne)、ガスコニー (Gascoigne)、ラングドック (Languedoc)、プロヴァンス (Provence)、ドフィネ (Dauphine) 等、フランスの南部諸州の重要都市である。リヨン、ディジョンはこれ等諸州には入らないが、それに近接した都市である。それによつて見れば、モリエールが主として南佛地方を活動の舞臺としてゐたことは確かである。

尙今少しく詳しく一座の足跡をたどるならば、一六四五年——一六五〇年の約五年間は、エベルノン公の保護を受

けた時代であつた。主として公及びその一族の娛みの爲、または公主催の饗宴の餘興として芝居をし、その餘暇に地方巡業を行つたものゝやうである。而してこの時代には、デュフレーヌが座長として一座を統率してゐたものゝやうである。

一六五〇年七月、エペルノン公は國王の不興を蒙つてグエイエヌを去ることになつたので、一座と公との關係は絶えてしまつた。公と個人的關係の深かつたデュフレーヌが一座を退いたのが、この時であつたとすれば、モリエールが彼の後を襲つて座長となつたのも、略この頃であつたのであらう。

一六五二年の暮に我々は一座をリヨンに於て見出す。この時以後、一座はリヨンを巡業の足溜りとしたらしく思はれる。當時のリヨンは芝居の非常に流行した都市であつた。イタリアからフランスに入國する玄關口とも謂ふ可き地點にあつたこの都市には、イタリア藝人の出入がとりわけ頻繁であつた。モリエールがリヨンの劇界から受けた教訓は小さなものではなかつたに違ひない。

一六五三年には、一座はコンチ公 (Le prince de Conti) の年金を受け、コンチ公專屬劇團 (La troupe de Monsieur Le prince de Conti) の肩書を許されてゐる。この恩顧は一六五七年頃まで続いたものと思はれる。その頃に至り、従來遊樂のみをこゝとしてゐたこの風流公達きんたうちは、急に心境に變化を來して反動的に熱烈なカトリック教信者となり、モリエール一座に對し、自分の名を肩書に用ふることを禁じてゐる。

さてラングドック州に於てはこの頃地方議會 (Les états provinciaux) の召集が頻繁であり、その會期は數ヶ月に亘るのが普通であつた。この地方議會は旅役者の一座にとつては書入れの好機會であつた。また州の太守としても、召

集した議員達の歡心を買ふ爲、特に旅役者を招いて興行せしめることがあつたのであつた。この議會の開催地は一定してゐなかつたので、モリエール一座も亦ラングドックの各都市を巡業することが多かつた。

この頃座員の變動も多かつたが、特筆すべきは女優としてマドレーヌ・ベジャールのほかに、マドモワゼル・ド・ブリー (Mlle de Brie) とマドモワゼル・デュ・パルク (Mlle du Parc) の二人の花形が、リヨンで見出されて、一座に加はつたことであつた。それは一六五三年のことであつた。ド・ブリーは本名を Catherine Leclerc de Rozet と云ひ、ド・ブリーといふ俳優の妻であつた。この俳優も妻と一緒に一座に加はつた。デュ・パルクはその當時は Marguise Thérèse de Gorla 名乗つてゐるたが、一座に加はつた後、一座の俳優で「太つちよのルネ」(Gros-René) と呼ばれて滑稽物を得意としてゐたデュ・パルク (本名は René Berthelot) と結婚してからは、マドモワゼル・デュ・パルク、又はラ・デュ・パルクと呼ばれた。彼女は非常な美貌で且つ魅力に富んでゐた。十七世紀のフランス文學に於ける五人の巨匠がこのデュ・パルクに懸想したことは有名な話である。その五人とは先づモリエール、次でコルネイユ、次でその弟トマ・コルネイユ (Thomas Corneille)、次はラ・フォンテーヌ (La Fontaine)、最後にラシーヌで、このラシーヌの戀だけが酬いられたと云はれてゐる。

かくして一座の陣容は益々整ひ、技藝の水準も次第に高まり、南佛に於ての第一の劇團と目されるに至つたのであつた。モリエールやマドレーヌにとつては、貴顯劇場の失敗以來の臥薪嘗膽が漸く報いられんとして、年來の願であつた巴里再擧の曙光が次第に見えて來たのであつた。

一六五八年、グルノーブルから北上した一座は夏頃、ルーアンで興行してゐた。モリエールはルーアン興行中に度

々巴里に通つて、國王ルキ十四世の唯一人の弟、アンジュー公フィリップ (Philippe, duc d'Anjou) ——後にオルレアン公——の專屬となるやう運動した。勿論南佛に於けるモリエールの名聲は既に巴里にも傳はつてゐたことであらう。またモリエールを推薦した有力者もコンチ公を始めとして幾人かあつたことであらう。とに角、モリエールの運動は效を奏して、モリエール一座は「王弟殿下專屬劇團」(La troupe de Monsieur, frère unique du Roi)の肩書を與へられ、年三百リーヴルの年金を俳優銘々に賜はることになり、(但しこの年金は遂に渡らなかつた。)尙その上に、王弟殿下のお取りなしにより、國王陛下並びに全宮廷の御前に於て、巴里最初の公演をすることになつたのである。

一六五八年十月二十四日、晴れの天覽芝居が行はれた。場所はルーヴル舊王宮の衛兵の間 (La salle des Gardes du Vieux Louvre) と呼ばれる廣間であつた。これは現在、ルーヴル博物館に於てカリヤチード廣間 (La salle des Caryatides) と呼ばれてゐるところである。

この時ルキ十四世は二十歳、モリエールは三十六歳であつたが、以後十五間に亘るこの兩者の間の友愛、忠誠、庇護、信頼の堅い結ばれを思ふと、兩者の初對面の機會となつたこの御前芝居は、非常に意味の深いものとなるのである。

勿論モリエール及びその一座の人々にとつては、一生の浮沈の分れる所であつた。殊にその席にブルゴーニュ宮の名優達が威儀を正して舞臺を見まもつてゐたのは、モリエール一座を不安と緊張とに戦かせるに充分であつた。

上演脚本はコルネイユの悲劇「ニコメード」と、モリエール自作の喜劇「戀をしてゐる醫者」(Le Docteur amoureux)

——この脚本は傳はつてゐない——であつた。この御前芝居の成績は先づ上乘であつた。然し特に好評であつたのは

添へ物の笑劇の方であつて、悲劇の方では女優達の藝と美貌とが取りたてゝ褒められただけであつた。このことはモリエールの將來の方向を暗示するものであつたのであるが、當のモリエールは未だこの事に氣づかなかつたやうである。彼が悲劇の幕が降りた後に、舞臺に立つて行つた口上はあまりに有名であるからこゝには述べないが、ブルゴーニュ宮の名優達を極度に持ち上げて、卑屈な迄に自分を低くしてゐるのは、勿論名優達の酷評を防ぐ賢明な手段でもあつたに違ひないが、當時のモリエールの心境としては、本氣でそのやうに考へてゐたものと思はれるのである。然し彼の心境がいつまでもその通りでなかつたことは云ふ迄もない。

ルキ十四世にはこの日の芝居がお氣に召したに違ひない。翌日早速、一座にプチ・ブルボン劇場 (L'Hotel du Petit Bourbon) に於て、イタリヤ人劇團と交替に、出演することを許したのであつた。

六

第三、プチ・ブルボン劇場時代

プチ・ブルボン館 (L'Hotel du Petit-Bourbon) といふのはその頃ルーヴル舊王宮と、セン・ジェルメン・ロクセロワ寺院 (L'église Saint-Germain l'Auxerrois) との間に在つた館で、フランソワ一世の治世にブルボン元帥 (le cométable de Bourbon) が反逆罪に問はれて處刑せられた時、没收せられて王室のものとなつてゐた。この館の中に大廣間がしつらへられてゐて、王族の饗宴や、喜劇の上演に使はれてゐた。

この頃ブチ・ブルボン劇場にはイタリヤ人のコメディヤ・デル・アルテ (commedia dell'arte) の一座が半永久的にたてこもつて、通常日 (les jours ordinaires) 即ち火曜日と金曜日と日曜日とに出演してゐたので、モリエール一座は非常日 (les jours extraordinaires) 即ち月曜日、水曜日、土曜日の三日間出演し、尙イタリヤ劇團に對し年額一・五〇〇リヴルの賠償金を拂ふことになつたのであつた。當時の習慣として通常日は觀劇の日となつてゐたのであるから、非常日に出演することは大きに不利であつた。然しその頃イタリヤ劇團といふものは王室の眷顧深く、その上ブチ・ブルボン劇場には既に以前から據つて居り、この劇場の正式の所有者となつてゐたのであつた。

さてブチ・ブルボン劇場の初演は一六五八年十一月二日であつた。この日を以てモリエール一座は巴里市民にお目見得をしたわけであつた。この日の上演脚本が何であつたか詳にしないが、初演當時の一座の主な演物は悲劇であつた。コルネイユの定評ある戯曲、エラクリュス (Héraclius)、『シンナ (Cinna)』、『ロドグューヌ (Rodogune)』、『シツド (Le Cid)』、『ポンペー (Pompe)』等が次々に上場せられたやうである。然し、悲劇に於けるモリエールの演技はどうも評判が芳しくなかつた。

然し次でモリエール自作の喜劇「粗忽者」(L'Écrouli) が上演せられるに及んで、形勢は俄然一變した。大成功であつた。悲劇に不評であつたモリエールの藝の質が、喜劇では有利なものとなつたのであつた。この喜劇の巴里に於ける初演の正確な時期も遺憾ながら不明である。然し一六五八年の暮若くは翌年の春と推定することは可能である。この成功によつてモリエール一座の巴里に於ける地歩は確實となり、一座の俳優達の自信もついたわけであつた。「粗忽者」の上演はその意味に於て、劃期的の事件であつた。以下ブチ・ブルボン劇場時代の主要なる事件を年代順に

羅列する。

一六五九年の春、復活祭の頃、デュ・パルク夫妻は一座を去つてマレー劇場に加入した。これは、マドレーヌ・ベジャール、ド・ブリの花形女優達との間に、配役のことで紛擾を生じた結果と見られる。これと入れ替りにマレー劇場からジヨドレー (Jodet) とレービー (L'Espy) の兄弟が来り加はつた。ジヨドレーはその鼻にかゝつた聲と、珍妙な風貌を以て、巴里人を喜ばせてゐた名喜劇俳優であつたが、此頃既に老境に入つて、振はなかつた。彼はその翌年死んだ。またこの時、ラ・グランジュ (La Grange) も入座してゐる。一座の「若い戀人」(Le jeune premier) の役を擔當し、且つモリエールの有力な片腕となつた。尙彼の「記録」(Le registre de La Grange) はモリエール一座の歴史を知るに最も貴重な文獻である。またデュ・クロワジー (Du Croisy) 夫妻が入座したのもこの時であつた。

一六五九年七月、イタリヤ人劇團が巴里を引き上げて故國に歸つたので、モリエール一座は早速通常日に出演することに改めた。

一六五九年十一月十八日、「嗤ふべき才媛」(Les Précieuses ridicules) の初演、モリエール最初の諷刺喜劇である上に、この喜劇の成功は一座の名聲を高めるのに大いに役立つた。

一六六〇年、復活祭の頃、デュ・パルク夫妻が一座に復歸した。

一六六〇年十月十一日、王室附屬建築物總監 (Le surintendant des bâtimens du roi) は突如プチ・ブルボン劇場の破壊を始めた。一座の人々にとつてこれは晴天の霹靂であつた。これより先、ルキ十四世はルーヴル宮の増築を計畫して居り、この増築にはプチ・ブルボン館の取壊しが必要であることは事實であつた。然しこの破壊はそれ程焦眉

の問題ではなかつた。(事實増築は一六六五年に始められたのであつた)殊に現にこれを使用してゐる俳優達に一言の挨拶もなく、取壊ちを始めるといふのは、何としても没義道な仕方と云はねばならない。多くのモリエール史家はこの處置を目して、モリエール一座の躍進に嫉妬を感じたブルゴーニュ宮、マレーの兩劇場の指金によるものと見てゐる。この推測の當否は別としても、一座がかやうな暴慢な取扱ひを受けたところから見れば、彼等が一般社界から受けてゐた尊敬の程度は推察せられるのである。

モリエールは直ちにこの暴狀を王に訴へた。王はモリエール一座の窮狀を氣の毒に思ひ、プチ・ブルボン劇場の替りに、パレー・ロワイヤル(Je Palais-Royal)に附屬する劇場を使ふことを許可した。その上王は總監に命じて同劇場の大修理を行はせることにした。

かくしてプチ・ブルボン劇場時代は一六六〇年十月十一日を以て終つたのであつた。(未完)